

道 中 理

令和6(2024)年9月18日

第189号

北海道中学校理科教育研究会



まず、子どもが主体的に学ぶ授業ありき ～「学びの再構築」につながる理科授業～

北海道中学校理科教育研究会 会長 三 浦 雅 美

道中理会員の皆様におかれましては、日頃より本会の活動に御尽力いただき、心より感謝申し上げます。本年度も、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、私が最近読んだ本に「私はこうして勉強にハマった」があります。著者の小林さやかさんは「学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話(坪田信貴著)」の主人公です。

本書は、単なる成績を上げるための勉強法を述べたのではなく、小林さん本人がどのようにモチベーション(動機)を高めたのか、そしてそれを維持し、よりよい自分になるための方法について大変わかりやすく記述されています。

読んでみると、私たちの理科実践研究に役立つ部分が多くありました。そこで、今回は、特に実践研究の経験が浅い若手の理科の先生に向けて、以下要旨を記述いたします。

小林さんは、人が何かを行う際の動機付けは、「期待(外発的動機付け)」と「価値(内発的動機付け)」の和によって決まるとしています。そして、「期待」と「価値」の説明をしています。「期待」は、「自分にもできる」という主観的な自信等。また、「価値」は、問題に正しく答えた時に得られる達成感等としています。

これを私たちの理科授業に置き換えると、「期待」を促す必要があるのは、授業導入から課題を設定する場面だと考えます。例えば、身近な自然事象に見られる不思議さを紹介し、生徒に「なぜ?」という問いを生じさせます。そして、生徒はその不思議さの原因や理由を知りたいと思います。このあと、生徒は具体的な解決すべき課題を設定し、課題解決するための観察・実験を考えます。そして、考える際に「これは自分にもできる」という自信があれば「期待」は高まると考えます。

では、この「期待」の裏付けとなる「自分にもできる」という自信を生じさせるにはどうすればよいのでしょうか。小林さんは、これを自分自身で育むことができる「自己効力感」として説明しています。そして、自己効力感の育む方法として、四つの方法を紹介しています。①他者からの具体的なアドバイスを参考にすること(言語的説得)。②日々の小さな目標を達成する経験を積むこと(過去成功体験)。③自分が元気になるものを知っていること(情緒的喚起)。④自分が憧れる人物の行動を真似してみたり、参考にしたりする(代理経験)。です。小林さん自身も、これを積み重ねることで自己効力感を高めることができています。

また、「成功体験」の重要性に触れています。それは、

成功体験を得るためには、失敗が許される環境が必要である。と述べています。

これも、理科授業に置き換えてみます。例えば、中学1年生などまだ、不慣れな生徒の場合には、課題解決に向けた観察・実験に取り組む場合、上手くいかなかったり、思い通りの結果にならなかったりする場合があります。この場合に、教師がそれは失敗ではないことをきちんと伝える必要があります。その上で、具体的な助言を行うことが大切だと思います。例えば、器具操作の留意点の確認方法やより正確な測定方法等を伝え、もう一度やってみることを促すことです。(ここで気を付けたいのは方法の伝授であり、理想的な実験結果を伝えることではありません。)このことは、自己効力感を育む要素である①言語的説得にもつながります。このような授業を通じた成功体験を積み重ね、失敗を恐れず、納得する結果を得るまで試行錯誤する生徒の育みにつながると考えます。

そして、このような授業の在り方が結果として子どもが主体的に学ぶ授業になると考えるのです。

今年度2年目を迎える本会の研究主題「学びの再構築を通して、自然との共生に向かう理科教育」は、「生徒が主体的に学ぶ」ことを前提としていると考えます。

「再構築」について、主題解説には「知識と知識を結び付けて、自然の事象に重ね合わせて理解し、多面的・総合的に捉えたりする」あるいは、「未知の問題に直面しても解決に向かうことができるように、自らの学び方を更新していく必要がある」とあります。このような学びの過程には、「自分にもできる」という期待を高めた生徒が、試行錯誤しながらも主体的に学ぶ姿があります。

今年は、「第62回北海道中学校理科教育研究会・函館大会」が10月18日(金)に開催されます。大会副主題『『学びの過程』に着目し、資質・能力を系統的に育む理科学習』のもと深堀中学校において三つの公開授業とブース発表、実践発表が行われます。研究主題が示す子どもの姿を具体的な姿として見いだすとともに、その姿に至る学びの過程について研究を深めていきたいと考えています。

また、来年(令和7年)8月6日(水)～8日(金)に「第72回全国中学校理科教育研究会北海道大会」が開催されます。今年から、具体的な準備が始まりますが、北海道の中学理科教師がチームとして結集し、全国の先生方を温かく迎えることができるよう、御協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

(札幌市立平岡中央中学校長)

研究主題

「学びの再構築を通して、自然との共生に向かう理科教育」

研究副主題

「『学びの過程』に着目し、資質・能力を系統的に育む理科学習」

函館市中学校理科教育研究会 研究部長 中村 英彦（函館市立戸倉中学校）

I 研究副主題設定の理由

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予想が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で、一人一人が持続可能な社会の創り手として、その多様性をもとに、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。そのため、現在の学校教育では、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成し、新たな価値につなげていくなど、複雑な状況変化の中で、目的を再構築することなどが求められている。

函館市中学校理科教育研究会（以下：函中理）では、これまで「問題を明らかにする」「問題解決に必要な情報を収集する」「予想・仮説を立てる」「予想・仮説を検証する」「結論を導く」のに必要な能力を『科学的探究能力』と定義し、研究を進めてきた。その『科学的探究能力』を高める上で、学習内容や学習形態、実験・観察の工夫や探究する場面での「見方・考え方」の働かせ方の工夫などを研究の視点として取り組み、一定の成果を得ることができた。

令和3年度から全面実施された現学習指導要領では、育成を目指す資質・能力が明確化された。その資質・能力を育成するために、「見方・考え方」を働かせ、主体的・対話的で深い学びにつなげていくことが大切である。これまでの函中理の研究として積み上げてきた『科学的探究能力』を高めるための様々な工夫をベースとし、明確化された育成を目指す資質・能力、そこに至るための見方・考え方を教師側が事前にしっかりと把握し、指導



計画を立て、実践していくことが必要である。また、それらが生徒にとって「主体的な学びになっていたか」「対話的な学びになっていたか」そして「深い学びに結び付いたか」という視点も重要である。そこで函中理では、学習指導要領解説に示されている資質・能力を育むために重視すべき学習課程のイメージ「探究の過程」と、教師が計画・指導・評価する学習のデザインについて研究を進めていくこととした。

函中理では「探究の過程」と教師が計画・指導・評価する学習のデザインに着目し、それらを「学びの過程」と定義した。また、資質・能力の育成に向け、「学びの過程」を通した学習がより効果的になるよう、3年間の中で計画的・系統的に取り組むことも重要である。そこで、今大会の研究副主題を「『学びの過程』に着目し、資質・能力を系統的に育む理科学習」とした。

II 研究副主題について

～「学びの過程」とは

前述のように、学習指導要領解説に生徒の「探究の過程」（課題の把握・課題の探究・課題の解決）が例示されている。「学びの過程」とは、その「探究の過程」と学習をデザインするために教師に必要とされる事項（指導計画・指導・評価・改善）

の両方を合わせたものである。

教師側は、育成を目指す資質・能力をしっかりと把握し、それをもとに「指導計画」を立てる。この計画の中では「見方・考え方」の働かせ方、「主体的な学び」「対話的な学び」の視点が欠かせない。それに向けて、学習内容や学習形態、教材・教具、実験・観察、ワークシートなどの工夫が求められる。その計画をもとに「指導」し、探究の過程の中で、生徒は学びを振り返り、学習を深めていく。また、指導者は、学習状況を把握・評価し、改善していくことで、資質・能力の確かな育成へとつながっていくと考えた。

Ⅲ 研究仮説

自然事象（日常生活に見られる事象も含む）に対する課題を理解し解決するために、「学びの過程」の中で、主体的・対話的な学びを通して計画的・系統的に学習していくことで、必要とされる資質・能力が育まれるであろう。

Ⅳ 研究の視点

- 1 主体的な学びに向けた（指導計画や教材・教具や観察・実験、学習評価等）工夫
- 2 対話的な学びに向けた（指導計画や教材・教具や観察・実験等）工夫

第62回北海道中学校理科教育研究会函館大会 大会主題

「学びの再構築を通して、自然との共生に向かう理科教育」

大会副主題

「『学びの過程』に着目し、資質・能力を系統的に育む理科学習」

- 1 主催 北海道中学校理科教育研究会
函館市中学校理科教育研究会
- 2 後援 北海道教育委員会
函館市教育委員会
北海道中学校長会
函館市中学校長会
渡島小中学校長会
函館市小学校長会
函館市小学校理科研究会
北海道エネルギー環境教育研究委員会

- 3 期日・日程 令和6年10月18日（金）
9：00 開会式・オリエンテーション
10：00 公開授業
11：00 授業分科会
13：00 全体会・各地区研究発表
14：30 ブース発表
15：40 閉会式
- 4 会場
函館市立深堀中学校
- 5 分科会及び授業者
【第1分科会】「身のまわりの現象」
吉田 正 教諭（函館市立桔梗中学校）
【第2分科会】「電気の世界」
能登屋 在 教諭（函館市立戸倉中学校）
【第3分科会】「化学変化とイオン」
片桐 尚哉 教諭（函館市立五稜郭中学校）
- 6 全体会（各地区研究発表）
【札幌地区】
芳賀 大二郎 教諭（札幌市立明園中学校）
【旭川地区】
田中 秀平 教諭（旭川市立永山中学校）
【釧路地区】
三光楼 正洋 教諭
（北海道教育大学附属
釧路義務教育学校後期課程）

会場校紹介

函館市立深堀中学校

生徒数 221名 9学級
函館市深堀町28-1
TEL 0138-52-2682

昭和36年に開校した本校は、函館駅や空港から近い利便地にあり、周囲に大学や多くの高校がある学園都市の一角にある。

校訓「信愛協調・合理創造」のもと、学校教育目標である「豊かな心を持ち、自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成」を目指し、教職員、保護者、地域が一丸となって、日々の教育活動に力を入れている。

授業校紹介

函館市立桔梗中学校

生徒数 548名 19学級
函館市桔梗町429番地 4
TEL 0138-46-9990

昭和59年に開校し、校訓「響生～響かせ合おう心と体を～」のもと、重点教育目標「自分の考えをもち、適切に伝えることのできる生徒の育成」を目指し、日々教育活動に取り組んでいる。また、「生徒第一主義」を合言葉に、保護者や地域の方々との連携を一層推進し、生徒たちの健全育成が図られるよう、学校教育目標・重点教育目標の具現に努めている。

授業校紹介

函館市立戸倉中学校

生徒数 282名 11学級
函館市戸倉町26- 1
TEL 0138-59-2141

昭和48年に開校した本校は、校区内に大学や短大、高等専門学校があり、多くの学生が集う地域にある。校訓「うつくしく心よそだて たくましく体よそだて するどく知性よそだて」のもと重点教育目標「未来を生き抜く力の育成」を目指し、教職員、保護者、地域が一体となり、日々の教育活動に取り組んでいる。

授業校紹介

函館市立五稜郭中学校

生徒数509名 20学級
函館市富岡町1丁目18- 2
TEL 0138-41-1332

平成28年4月に開校した本校は、校名の通り、校舎から国指定特別史跡「五稜郭跡」にそびえる五稜郭タワーを臨み、JR五稜郭駅にも近い立地にある。重点教育目標である、「自己を見つめ良さを磨き 高め合う 生徒の育成」のもと、今年度は教職員が一丸となって「確かな学びづくり」と「魅力ある学校づくり」をキーワードとし、「子どもたちを未来につなぐ」教育活動を展開している。

第1分科会 第1学年

「身のまわりの現象」 ～音の伝わり方～

授業者

函館市立桔梗中学校 吉田 正 教諭

I 授業の目的

第1分科会では、音の伝わり方において、基本的な観察・実験を行い、そこから生じた疑問や気付きから新たな課題を生徒自らが設定し、探究することで、生徒一人一人が興味・関心をもって音の伝わり方を理解することを目的としている。

II 研究との関わり

(1) 主体的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験、学習評価等)工夫

音の伝わり方について確認するとともに、新たな疑問や課題をもちやすくするために、音に関する四種類の実験(音さの聞こえ方・水中での音の聞こえ方・真空容器内での音の聞こえ方・振動する物質が変わったときの音の聞こえ方)を行うなど、教材・教具を工夫した。また、実験を通して新たにもった疑問をもとに、個人で課題を設定させ、主体的に学習に取り組む態度を高められるよう、指導計画を工夫している。

(2) 対話的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験等)工夫

実験中の個々の気付きや疑問を全体で共有する場面を設けるなど、生徒個人の気付きが全体へとつながり、新たな対話的な学びができるような工夫をしている。

III 本時の授業

前時までに行った四つの実験より、生徒自らが見いだした新たな課題について、解決していく。その際のグループを、同じような課題を中心に自己選択することで、生徒同士が主体的・対話的に活動し、音に対する理解を深めていきたい。また、本時で得られた知識を活用し、他の日常的な現象を説明することにより、次の学習内容への意欲向上を図りたい。

当日は多くの先生方に御覧いただき、御指導、御助言をいただければ幸いです。

第2分科会 第2学年

「電気の世界」 ～未知の回路～

授業者

函館市立戸倉中学校 能登屋 在 教諭

I 授業の目的

電流はエネルギーの中でも最も汎用性が高く、身近なものである。しかし、その半面、直接見ることができないため概念を形成しにくく、学習過程で計算処理を求められることが多いので、生徒にとっては難しい、苦手と感じがちな単元である。そこで、直列回路の抵抗を考える実験では、生徒に学習で得た知識を活かす喜びを感じ、主体的、対話的に学習に向かう姿勢を育むことを目的としている。

II 研究との関わり

(1) 主体的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験、学習評価等)工夫

ブラックボックスを使用することで、未知の回路を解明するという知的好奇心を刺激し、教材への興味・関心を高める工夫をした。また、測定値の処理が複数回必要になるので、測定や計算処理が苦手な生徒でも周囲の生徒の真似をしながら自ら課題に関わることができる考えた。

(2) 対話的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験等)工夫

ブラックボックスの表面にホワイトボードシートを貼り、それに書き込むことで思考過程を交流しやすくなるように工夫した。また、実験1では2段階に分けて実験結果や考察の交流を行う。自身の考えに最初の交流で得た学びや気づきを加え、次の交流でのより良い表現や伝達の方法を考え、「学びの再構築」へとつなげる。

III 本時の授業

ブラックボックスを使用し、測定値から抵抗の配列を推測し、その理由を考察する。この授業では、実験結果をどのように分析・解釈し、それをどのように他者に伝えるかを生徒に考える姿を期待したい。また、既習事項を使って課題解決することにより、探究の過程を強く意識することで、今後の学習への意識向上を図りたい。

第3分科会 第3学年

「化学変化とイオン」 ～金属樹～

授業者

函館市立五稜郭中学校 片桐 尚哉 教諭

I 授業の目的

第3分科会では、「自然の事物・現象の中に問題を見だし、自ら課題を設定して予想や仮説を検証するための実験を計画・実行・振り返りをする探究的な授業」を目指し、取り組んできた。金属樹は、金属の種類や水溶液の量・濃度・種類など、様々な条件を変えることで析出する量やでき方、見え方などが多様に変化することから、生徒の探究的な学びに適した教材である。本時では、金属樹に関わる探究的な学びを通して、理科を学ぶことの面白さや自己効力感を味わわせていきたい。

II 研究との関わり

(1) 主体的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験、学習評価等)工夫

目の前で金属が析出し、模様ができてくる様子は、生徒にとって興味深い現象である。「なぜそのようなことが起こるのか?」「より多くの金属樹を出すためには何を変えればよいのか?」など素朴な疑問が出てくる。その疑問を大切にしながら授業を行うことで、主体的に学習に取り組む態度を高めていく。

(2) 対話的な学びに向けた(指導計画や教材・教具や観察・実験等)工夫

端末を活用し、途中参照や他者参照を常に行うことができる状態をつくり、必要に応じて生徒が他のグループの直接聞きに行くことができるなど、様々な対話の方法を取り入れる工夫をした。

III 本時の授業

金属樹を題材として用い、金属樹が析出する条件や析出量の変化を明らかにする実験方法を考え、実験、振り返りを行っていく。学びの様々な過程で、他の班のデータを参照したり、自らの実験計画に変更を加えたりして、自らの学びをよりよいものにしていこうという姿が見られるような授業をつくり出したい。

◆ 令和6年度 北海道中学校理科教育研究会 夏季研修会要旨

7月27日（土）ホテルライフオート札幌

7月27日（土）に、ホテルライフオート札幌にて道中理夏季研修会が行われた。旭川、函館、釧路、札幌を中心に多くの先生方が参加し、実りの多い研修会となった。また、岩見沢からも先生方の参加があり、道内に道中理の活動が広がっていることが実感できる研修会となった。

《夏季研修会の内容》

1 第71回全中理山梨大会 発表概要

教育課程 三光 楼 正洋 教諭
（北教大附属釧路義務教育学校後期課程）
「資質・能力の育成を図る
小中一貫カリキュラムの開発」



本研究は、未知の事象や課題に対して科学的根拠をもって、自分なりの最適解を導き出すことができる生徒の育成と、小中一貫した教育の視点から理科の見方・考え方を身に付け、課題解決のために既習事項を用いたり、見通しをもって取り組んだりする姿を引き出すカリキュラムの開発をねらいとした。

そのために、理科のある小中7年間を見通した目指す子どもの姿と系統表を、前期課程の教員とともに作成したり、前期課程から発達段階に応じ理科の見方・考え方を養う授業づくりを行なった。また、授業づくりの際は、単元のストーリー性と生徒の疑問から課題を見いだすことを重視した。

成果として、小中一貫したカリキュラムを作成することで、理科の見方・考え方を含めた学習内容につながりをもたせた授業構築ができた。生徒は時間的・空間的に自然事象を捉え、多角的な視点を持ち、それぞれを関連させながら考える姿が見られた。

観察・実験 室永 瑞貴 教諭

（北教大附属札幌中学校）

＜発表：渡邊 雄人 教諭（札幌市立篠路中学校）＞
「多面的に捉え、実証性を高める観察、実験」



本研究は、観察・実験の結果を多面的に捉えたり、生徒が納得いくまで繰り返し検証することを通して、「知識の再構築」が行われ、知識の概念的な理解につながることをねらいとした。「構想」「実行」「検討・改善」の過程で、生徒の思考が行き来する「試行錯誤」を重視し、「試行錯誤」する中で、他者との関わりから自然事象を多面的に捉え、「納得解」へと更新していくことで、「知識の再構築」が行われ、知識の概念的な理解につながると考えた。そのために、生徒が自然事象に様々な視点から何度もアプローチし、実証性を高めることができる授業展開の工夫や生徒の多様な視点を共有できる工夫、お互いの視点や考えを対話しやすくする工夫を行った。

成果として、多面的に観察・実験を行うことで、実証性が高まり、自他共に納得できる「納得解」を求め更新し続けることを重要視した授業展開を通して生徒は主体的に考え、知識の概念的な理解につながっていくことを確認することができた。



本研究は、科学的に探究し、生徒が自然との共生に向かうことをねらいとした。科学的に探究する力を育むには、生徒自らが問いをもち、探究の過程を見通したり、振り返ったりしながら、理科の見方・考え方を働かせて主体的かつ協働的に学ぶことが必要であり、このような科学的に探究する力を身に付け、持続可能なWell-beingを模索することが自然との共生につながると考えた。そのために、近隣のヒグマ頻出問題を導入とし、ストーリー性のあるユニット構成を工夫したり、見通しと振り返りを促す複線型の授業を実施したり、1枚ポートフォリオによる形成的評価の工夫を行った。

成果として、身近な教材を複線型の授業で生徒の思いに沿って探究することで、多様な思考が生まれ、理科の見方・考え方を自ら働かせたり、既習事項を自ら活用し身近な環境について考えたりする姿が見られ、持続可能なWell-beingを模索し、自然との共生に向かうことができた。

2 第72回全中理北海道大会に向けて

三浦 雅美 会長
野田 隆之 事務局長

令和7年8月6日(水)～8日(金)に行われる全中理北海道大会に向けての今後の取組と、全中理山梨大会閉会式の次回開催地紹介の内容と北海道大会紹介動画、北海道大会の1次案内についての紹介があった。

3 ユースネット活動報告

寺田 和史 教諭(札幌市立前田北中学校)
今井 大貴 教諭(札幌市立藻岩中学校)
藤岡 健人 教諭(札幌市立藤野中学校)



昨年度のユースネット冬季特別研修会の様子と、学年別授業づくりチームの研究授業とその活動が報告された。昨年度のユースネットの冬季特別研修会には、旭川地区、函館地区からも参加があり、お互いの実践や授業での工夫、授業で使用しているアプリ等の交流が行われた。また、授業づくりでは、導入で使うためにグラウンドの土からマグマづくりを行ったことや、Chromebookと100円均一で販売しているスマートフォン用魚眼レンズを組み合わせ、金星と地球の位置関係と地球から見た金星の姿を関連付けて観察する工夫などが紹介された。さらに令和7年度の全中理北海道大会の若い理科教師の集いに向けて準備を進めていくことが報告された。

4 助言

北海道教育大学札幌校 高久 元 教授から次のような御助言をいただいた。

○研究主題について、自然現象の理解を中心に据え、自然との共生を目指した研究であることに価値を感じる。

○全中理山梨大会の教育課程の研究発表について、小中一貫した教育は今後より必要性が増す視点であり、義務教育における7年間の理科教育を通じて子どもの問いを大切に、同様の授業展開で繰り返し自然と向き合うことは子どもたちの力を効果的に育むことにつながる。さらにポートフォリオなどの共有ができると個別最適な学びを行う上でもさらに有効である。

○全中理山梨大会の観察・実験の研究発表について、生徒の思いに沿い、繰り返し観察・実験を行い、生徒一人一人が納得できる課題解決を行うことは、自然事象に対する生徒の深い理解につながる。実践例であったエコカラムなどの生物題材は明確な結論が出にくいものであるが、だからこそ、他者との対話や試行錯誤が大切である。

○全中理山梨大会の環境教育の研究発表について、「持続可能」「Well-being」は第4期教育振興基本計画のコンセプトにもあり、今後の教育も見据えたものであった。また、ヒグマを導入で用いたことや、教材開発、緻密な単元計画により身近な自然環境に対する意識が高まったのは非常によい成果である。

○ユースネットの活動報告について、若い先生方がお互いの取組を意識しながら、研鑽を積んでいる姿が印象的であり、今後のさらなる活躍を期待させる内容であった。



令和6年度「道中理」常任理事会・理事会・事務局総会報告

4月27日、令和6年度の道中理常任理事会・理事会・事務局総会が、ホテルライフオー・札幌で開かれました。会では令和6年度の事業計画・各部活動計画・予算案について審議され、原案通り承認され、役員の選出、理事・事務局員の委嘱が行われ、今年10月の函館大会の運営についても確認されました。

令和6年度 役員、理事、事務局員

会 長	三浦 雅美(札幌市立平岡中央中学校校長)	新	会計監査	阿部広一郎(札幌市立厚別中学校校長)	再
副 会 長	上原 大岳(旭川市立東光中学校校長)	再	会計監査	豊村 和史(札幌市立星置中学校校長)	再
副 会 長	橋本 智也(函館市立銭亀沢中学校校長)	再	事務局長	野田 隆之(札幌市立北都中学校校長)	新
副 会 長	河原 和範(釧路市立桜が丘中学校校長)	再	次 長	中村 英之(札幌市立啓明中学校教頭)	新
副 会 長	林 康弘(札幌市立東月寒中学校校長)	再	次 長	渋谷 啓一(札幌市立もみじ台中学校教頭)	新
副 会 長	熊谷 誠二(札幌市立西野中学校校長)	再	次 長	小路 美和(札幌市立新川中学校教頭)	再
副 会 長	三浦 英悟(札幌市立琴似中学校校長)	再	庶務部長	林 義人(札幌市立新琴似北中学校教諭)	再
副 会 長	古川恵美子(札幌市立平岡緑中学校校長)	新	会計部長	長沼 文博(札幌市立陵北中学校教諭)	再
旭川地区事務局長	進藤 貴史(旭川市立東明中学校教頭常任理事)	新	組織部長	戸田 賢之(札幌市立平岡中央中学校教諭)	新
函館地区事務局長	高野 克(函館市立深堀中学校教頭常任理事)	再	編集部長	田口 佑弥(札幌市立向陵中学校教諭)	再
釧路地区事務局長	岩谷 拓実(釧路市立富原中学校教頭常任理事)	再	研究部長	伊藤 雄一(札幌市立美香保中学校主幹教諭)	再
顧問104名 常任理事16名 理事37名					

